

2011年 のISAワークショップの報告

- ▶日程：2011年 8月26日（金）～8月30日（火）
 - ▶場所1（8月26日～28日）：ソウル（ホテルアカデミーハウス）ISAワークショップ
 - ▶場所2（8月28日～30日）：ブアン（マチのゲストハウス）スタディツアー
- ▶今回のISAワークショップは、'2050年、核に依存しない東アジアの平和は、可能であるのか'というテーマでソウルとブアン（全羅北道）で開催された。このワークショップは、2003年から、韓国と日本の草の根活動者が主になってやってきたが、中国や他のアジアの国の人も一緒になるため、方式を開発し、2008年(福岡)からは、ISA(Issue defining, Scenario workshop, Alternative strategy)のやり方でやってきて、2009年(パジュ)、2010年(葛巻)、2011年までは、まちから作っていく自治というものを地元学を含め、エネルギー自立という概念でやってきた。特に今年は、福島の災害があって、被害地域である南相馬という町から支援活動をやっている町の住民（今野聰様さん）を招き、現場の声を聞きながら話し合った。今回のワークショップは、次のように、今までとは少し変えた。
- 1) ソウルとブアン（核廃棄物処理場を反対して、激しい闘争から住民投票が行って今は、新再生エネルギー特区と指定された町）で分けて ソウルでは、できるだけソウル地域の町で活動をやっているリーダーを招き、Issue DefiningとScenario Workshopをやって充実な議論をやることができたし、ブアンでは、現場ツアーとブアンのまちリーダーたちとの対話をに行って現場調査を2泊3日間やった。
 - 2) 特にソウルで開催のメリットでは、興味がある人が参加しやすいということで、Issue definingの時は、二日目の午前中を、public forumでやってより多い人々が参加し、テーマを広げた。今回の参加者の中では、チエルノブイリに訪問してきた李ホンソクさんからの報告と、福島南相馬の被害地域の住民の声を聞くことができ、現場からの声がつたえられた。特に韓国では、福島の災害がよく知られていなかった為、今野さんの発表は意味深かった。
 - 3) 韓国も日本も若者を中心にするときは、この人々に向けて勉強会を開いて事前学習をやったことも今までとは少し発展したものであるといえる。特に韓国のハンシン大学学生では、

今年1月東京へのスタディツアーパートに参加した人が多し自分の関心を高める機会にもなっている。

4) 2010年からは、40代になっている主な参加者が20代と一緒に参加してもらい次の世代と一緒に育ち合う形を取り入れた。2011年は、恵泉女子大学と庭野平和財団から推薦を受け、日本側から13人の若者と韓国でもハンシン大学から7人、アリから3人そして、活動者でやりながら若いスタッフが3人くらい参加して、若者向けのプログラムと先輩グループのプログラマで分けてやってみた。その結果、若者は若者同士で親しくなったり、ソウル市内での新しい経験をすることができた。また先輩グループは、最近の地方自治や町づくりの問題から今後の課題について深く話し合うことができ、韓国と日本の間で世代別の話すことがうまくできた。

5) 特に若者の参加は、日本の場合、恵泉大学と庭野平和財団、韓国の場合、ハンシン大学とアリが中心になって募集し、若者向けてのファーローアップを考えることができ、今後のことと一緒に工夫するつもりである。これは、ただ韓日の交流ではなく、大学と市民団体との協力もあり、現場と大学での連携で、今後の新しい協力プログラムをデザインするつもりである。今回の参加者の現状は次になっている。

	韓国	日本	総計
大学生、大学院生	10	13	23
現場活動者	5 (ソウル) 8 (ブアン)	5	18
若い地方議員 或いは公務員	2	1	3
専門家	4	1	5
先輩グループ	5	3	8
総計	34	23	57

韓国の場合：各地域のYMCA, YWCA, ハンサリム、エネルギー正義行動、江北地域草の根フォーラム、エネルギー研究所、ハンシン大学(平和と公共性センター)、梨花女子大学、延世大学などから参加。

日本の場合、東アジア環境情報発展所、JVC、神奈川ネットワーク(生活クラブ生協)、東京青年連合など、福岡被害地域、恵泉女子大学、慶應大学等

6) 先輩グループは、今回のワークショップ間でやりながら、今まで足を運んだ現場の事例

を町からの提案というテーマで、一つの本としてまとめることを決め、今後本の作業に入るつもりである。

7) また、今後のISAに関しても年一回ではなくスカイプなどで2ヶ月1回のテンポでやることを決め、次は10月に今回のワークショップをもっと具体的に評価をすることと、来年の計画そして、本にするための計画などを相談するつもりである。